

◀ Le Cid ▶ について

村 瀬 延 哉

(1)

戦後、Corneilleの作品を、彼が生きた時代との社会的、政治的関連から、更に巨視的に言うなら、封建モラルや絶対主義の史的観点から、理解しようとした研究者として、Bénichou, Couton, Dort 等の名が挙げられる。又 Nadal や Doubrovsky の研究も、彼等独自の倫理的、形而上学的観点が、分析の根拠にあるものの、史的背景を無視しては理解できないであろう。我々は、まず、この種の研究の先鞭をつけたとも言える Bénichouが、Corneille 的人物像をどのように把握していたか、概観しておきたい。

Bénichouは1948年に発表した◀Morales du grand siècle▶の序で、17世紀フランスの精神的潮流を三種に大別し、各々に対応する作家の名を挙げている。英雄的道德 (morale héroïque) の Corneille, 厳格なキリスト教道德 (morale chrétienne rigoureuse) の Pascal, 世俗的道德 (morale mondaine) の Molièreである。¹⁾

morale héroïque の特徴は、傲岸な自己肯定にある。このモラルを生きる人々は、自己の情念を、社会的桎梏としての義務の観念に照らして、抑圧する必要を認めない。しかも、彼らの行動は、多くの場合、一般的な善 (bien) の概念と矛盾しない。その訳は、彼らの行動が、欲望とも倫理とも峻別し難い、誇り(orgueil) 或いは名誉 (gloire) の感情に促されて、行われるからである。²⁾

誇りにも様々のレベルがある。◀Le Cid▶で、王子の教育係のポスト

を Don Diègue と争う Gormas 伯爵、或いは≪Rodogune≫の Cléopâtre を始めとして、Corneille 劇に無数に登場する王座に執着する男女の名誉欲は、社会的名声や権力といった物質的レベルにとどまっている。しかし、このレベルでの誇りはいかにも脆い。敗北の危険が至る所にある。この屈辱から脱れるために、誇りの対象は物質的レベルから、精神的レベルに移される。ローマ帝国の脅しを前にして、アジアの小国の王子 Nicomède が見せる堅忍不拔のストア的精神や、皇帝 Auguste をさして、**「しかし、Emilieの心は皇帝の力でも動かさません」³⁾**と叫ぶ Emilie などは、弱者がいかにして誇りを守るかの例である。

ストア主義は、抗し難い不幸に見舞われた時、人間の傲慢さが、己れの尊厳を守るために考えついた解答であるという Bénichou の指摘は⁴⁾、決して目新しいものではなからうが、Corneille の人物達の精神構造を説明するには、説得力がある。

このように、一口に誇りとか名誉とか言っても、何によってそれを満足させるかについての価値体系が存在する。王位を含めて物質的偉大さは、最終的には二次的価値しか与えられない。王座に固執して破滅する Cléopâtre のようなケースは、少くとも Bénichou によれば、Corneille 劇の例外である。支配者の名誉は、力の無制限な行使ではなく、謀叛を企てた Cinna 等を許す、Auguste の寛容の中にある。それは又、彼にとって、王位にあっても暗殺を恐れ、不安の虜となっている自己を回復する行為であった。

ところで、Corneille 劇の英雄達のこのような心性の起源は、どこにあるのか？ 彼らの精神構造が、一種の傲慢さを特徴としている以上、それを何よりも罪であると教えたキリスト教道德の強い影響によって形成されたとは考え難い。Bénichou は、この種のタイプの人間を理想としたのは、封建貴族達であると断定している。⁵⁾ morale héroïque とは貴族のモラルである。

17世紀前半のフランスは、Richelieu、Mazarin の手によって、絶対主義

の確立が進められたが、他方《フロンドの乱》にも明らかなように、それに対する大貴族の抵抗、陰謀が相次いだ時期でもあった。この政治的不安定は、中世からの封建貴族の古い理想を再燃させる格好の機会を与えた。ルネッサンスは、この点では、中世世界との断絶を意味しなかった。むしろ、その理想を再生強化する役割を果たした。騎士道は、ブルータルクやセネカに触れることで若返り、アムール・クルトワはプラトンを発見して、新しい力を注がれたのである。⁶⁾

以上が、Bénichou が描く *Corneille* の英雄像の大まかな輪郭である。*Corneille* の人物を封建貴族と二重写しにして捉えるこのような見方は、研究者によって様々なニュアンスの相違があるものの、今日ではかなり広い支持を得ているとしなければなるまい。従って我々も又、彼や *Couton* の先例に倣いながら、《Le Cid》に現れた歴史性、特に封建モラルがどのような形で反映されているかを、以下で検討していきたい。その際、主として二つの観点からこれを行う。第一は、作品と当時の政治状況の関連を通して、第二は *Rodrigue* と *Chimène* の恋愛の分析によってである。

(2)

封建制から絶対主義への移行を示す指標の一つは、封建貴族が王権へ隷属し、宮廷貴族化していくことである。従って、我々も王権に対する服従と反抗という観点から議論を進めよう。だがそのためにも、まず《Le Cid》に登場する王の、歴史的性格を考慮しておかねばならない。

国王 *Don Fernand* は、17世紀のフランス国王のような絶対君主ではない。史実によれば、彼は11世紀のカスティリア国王であり、その権力は比較的弱体であったと想像できる。しかし、時代色とか地方色とかに無頓着で、万事を17世紀フランス社会を基準に判断する傾向のあった当時としては、このような無力な王の姿は、王の権威を汚すものと感じられた。この観点から *Académie* は、*Don Gomès* と *Don Diègue* のいさかいの際と、モール人襲来を知らされた時の *Fernand* 王の態度が優柔不断で、適切な対応を

欠くと非難している。

... au lieu que le Roi envoie Arias vers le Comte pour le porter à satisfaire don Diègue, il falloit qu'il lui envoyât des gardes pour empêcher la suite que pourroit causer le ressentiment de cette offense...⁷⁾

(国王は、伯爵の許にアリアスを遣わして、ドン・ディエグへの謝罪を促すが、侮辱に対する恨みが引き起すであろう事態を未然に防ぐためには、衛兵を送るべきだった。)

Toutefois ce n'est pas par cette raison que le poète se peut défendre, la véritable étant que le Roi n'avoit point donné d'ordre pour résister aux Mores, de peur de mettre la ville en trop grande alarme.⁸⁾

(とはいっても、作者がこの理由で弁護される訳ではない。事実、国王は市を恐慌に陥し入れることを恐れて、モール軍を迎え討つ命令を発していないからである。)

Académieの裁定が、終生念頭を離れなかった Corneille は、四半世紀後に、次のように弁明している。

... don Fernand étant le premier roi de Castille et ceux qui en avoient été maîtres auparavant lui n'ayant eu titre que de comtes, il n'était peut-être pas assez absolu sur les grands seigneurs de son royaume.⁹⁾

(ドン・フェルナンはカスティリア初代の王であり、彼以前にこの地を支配していた者は、(レオン王国の封臣で)伯爵の称号しか持っていなかった。このような訳で、彼は自分の王国の大領主達に絶対的な力を振えなかったのであろう…)

《Le Cid》の直接の出典である Guillén de Castro の劇と比較すると、王の威信を保つための Corneille の配慮が分る。スペインの作品では、Don Diègue は王の面前で侮辱される。だが、王は伯爵の威勢、とりわけ彼の味方がモール人と結託して反乱を起すことを恐れ、退去を制止できないばかりか、事件に目をつぶろうとする。¹⁰⁾ Corneille の場合は、侮辱が王のいない所で行われるし、Castro の王のような卑劣な性格は払拭されている。

又、同じ *Corneille* の作品でも、初版と60年版では、モール人襲来に対する王の対処の仕方が、わずかながら違っている。初版では、

Puisqu'on fait bonne garde aux murs et sur le port, / Il suffit pour ce soir.¹⁰

(城壁と港は厳しく警戒しているから、今夜はそれでよかろう。)

とあるが、60年版では、

Faites doubler la garde aux murs et sur le port.¹¹

(城壁と港の番兵を倍にしておけ。)

と修正される。これも *Académie* の意見を考慮した結果と考えられる。

※ ※ ※

王権と封建大貴族の対立は、《*Le Cid*》中の決闘の是非を巡る論争に顕著に現れる。作品では決闘が三度行われる。最初は、*Don Gomès* と *Don Diègue* が口論の末、剣を交える¹²。二度目は、父の復讐を誓った *Rodrigue* が *Don Gomès* に挑む。決闘の場面は舞台で演じられない。最後は、*Rodrigue* の代理戦士 *Don Sanche* の間で、*Fernand* 王の許しを得た後、行われる。二度目同様、決闘は舞台で演じられない。*Couton* は、各々の決闘の性質の相違に注目し、最初を《*rencontre*》、二番目を《*appel*》、最後を《*duel judiciaire*》と呼んでいる。¹³

《*appel*》とは、王の許可もしかるべき儀礼も踏まず、多くは野原や森の中で行われた決闘のことで、イタリア戦争の結果、*Henri III* か *Charles IX* の頃にフランスでも流行り始める¹⁴。その後、この種の決闘は大流行し、*Henri IV* 治下の1598—1607年の間に、およそ四千人の貴族が死んだと伝えられる¹⁵。決闘禁止令が1609年、1617年、1626年に出されたが、この傾向は容易に改まらなかった。1626年の禁止令は *Richelieu* によって出されている。序文には、禁止の理由として、フランス国家の支柱である貴族がこのような形で命を落すことは、国家の安全と繁栄に著しい障害をもたらすことが挙げられている¹⁶。更に、裁判の代りに、決闘によって黑白をつけようとしても、公平な結果が得られないことも問題であった。

Rodrigueと Don Sancheの決闘は、他の二つと違い、王の許可という合法的手続きを踏んでいる。この決闘の起源は古く、Philippe le Belの時代にまで溯る。裁判で真疑の明らかにならぬ犯罪の解決に用いられ、決闘の結果は神の裁きとされた。しかし、実際に行われることは稀で、16世紀になると完全に廢れる。Henri IIが許可したのが最後のケースらしい。Trenteの宗教会議でも禁止された¹⁸。

このように《Le Cid》に見られる決闘の形態のうち、一番目と二番目は、Corneilleの時代に実際行われていたが、三番目は既に過去のものであった。

Richelieuは決闘を認めなかった。彼の意向は、Don Fernandのセリフに、そのまま反映している。

*Cette vieille coutume en ces lieux établie, / Sous couleur de punir un injuste attentat, / Des meilleurs combattants affaiblit un État; / Souvent de cet abus le succès déplorable / Opprime l'innocent, et soutient le coupable.*¹⁹

(不正な行為を罰するという口実で、我が国で昔から行われているこの習慣は、とかく国をして最良の武士を失わせる。また、この悪弊は、しばしば無実の者を罰し、罪人が救われるという嘆かわしい結果を生む。)

もっともこの大様で、多少柔弱な王は、Chimèneと特に Don Diègueの嘆願に押し切られて、決闘を許可する。しかし、その際でも彼は、この解決方法が意に適わぬことを示すために、決闘に立ち会わない。

決闘を支持し、王権に反抗する封建大貴族の姿を代表するのは、Don Gomèsである。彼は、カスティリアを敵の侵略から守り、Fernand王の王座を安泰たらしめているのは、己れの武勇であるという誇りを持っている。侮辱の謝罪が要求された時、彼はこれを拒絶して、答える。

*Un jour seul ne perd pas un homme tel que moi. / Que toute sa grandeur s'arme pour mon supplice, / Tout l'État périra, s'il faut que je périsse.*²⁰

(わしほどの男が、わずか一日で滅びるはずがない。王が威勢をふるって、武力でわしを処刑したければするがいい。わしが死なねばならぬようでは、全王国も滅びるだろう。)

《わしほどの男が、わずか一日で滅びるはずがない》という伯爵の言葉は、決して誇張でない。先程触れた Guillén de Castro の冒頭の部分が示す通り、封建社会では、大貴族が蜂起する時、国を二分する内乱の危険性が存在した。《Le Cid》でも、その可能性が暗示されている。Don Diègue が侮辱されたと聞き、五百人ほどの《amis》が彼の館に集まる。²¹⁾ Don Gomès が殺された時にも、同じ位の人数が集まったことは、Don Diègue の言葉から想像できる。

Je crains du Comte mort les amis et la suite;/ Leur nombre m'épouvante,
et confond ma raison. ²²⁾

(死んだ伯爵の友人や家来が気にかかる。相手の数が多いのが心配で、わしの分別も乱れる。)

Scudéry は、当時のカスティリアの宮廷規模からして、両家に少くとも五百人ずつの貴族を結集できたとは信じ難いと非難した。²³⁾ だが Académie は、理を Corneille の方に認める。《大身の貴族の争いでは、宮廷は常に二分され、中立派はどちらの党派からも相手にされない人たちぐらいしか残っていない》²⁴⁾からである。

封建社会における貴族の主従関係は、封主(suzerain)と封臣(vassal)の結びつきを模範としている。Couton によれば、有力な大領主の周辺を、無為で、富裕でない貴族達が、領主の血縁者と共に、家子郎党のような形でとり巻いている。彼らは、領主の上に位置する国王より、自分達の直接の封主の方により一層の義理を感じていて、事ある時は武器を手にする。《Maximes》の作者の父にあたる La Rochefoucauld 公爵が、La Rochelle 包囲戦の時(1628年)、4日の間に、千五百人の貴族を徴兵してきて、《この中に私の縁故でない者は一人もない》と言った話は、この封建的關係が、Corneille の時代まで存続していたことを示している。²⁵⁾

さて、このような武力とストア的な精神力を背景にして、Don Gomès は、最高の価値を、王権でも国家でもなく、自分の名誉に置く。

... pour conserver tout ce que j'ai d'estime, / Désobéir un peu n'est pas si grand crime,²⁹

(わしの名声を保つためなら、多少王の意向に反するくらい、たいした罪ではない。)

J'ai le coeur au-dessus des plus fières disgrâces; / Et l'on peut me réduire à vivre sans bonheur, / Mais non pas me résoudre à vivre sans honneur.³⁰

(王からどんなひどい不興を買おうと、わしの勇氣はびくともしない。不幸な身の上に追いこまれてもかまわぬが、名誉を失ってまで生きていく気にはなれない。)

貴族の名誉に関する事柄は、王と言えども自由に裁量する権利を持たない。この意味で決闘は、貴族の自律性の象徴であり、問題解決のため王権に服従することは恥辱となる。《Le Cid》初演時には存在したのであろうが、恐らく Richelieu の意をうけて Corneille が削除したため、初版本にも印刷されることなく終わった Don Gomès のセリフが、この信念をよく示している。

Ces satisfactions n'apaisent point une âme: / Qui les reçoit n'a rien, qui les fait se diffamer, / Et de pareils accords l'effet le plus commun / Est de perdre d'honneur deux hommes au lieu d'un.³¹

(この謝罪は誰の心も癒しはしない。謝罪を受ける者が何かを得る訳ではないし、する側は自分の名誉を傷つける。このような和解の一番ありふれた結果は、片方だけでなく、両方の人間の名誉を失わせることだ。) なお、《satisfaction》とは、この場合、王命によって和解のため、侮辱の償いをするを指す。

このように、王権に対し名誉を対峙させることによって、封建道徳は、Don Gomès の内で、一種個人主義 (individualisme) 的な風貌をおびることになる。Bénichouが、この貴族的伝統の後継者を、近代民主主義の理論

的基礎を打ち立てた Montesquieu に求めるのも、この理由による。²⁹⁾

※ ※ ※

Don Gomès に対して、Rodrigue や Arias は、王権の絶対性を認めている点で、Cornelle の前に開けつつあった、絶対王政の臣下にふさわしい態度を示していると言わねばならない。戦場での武勲が、Don Gomès に抱かせている特権意識を非難して、Arias は、

... qui sert bien son roi ne fait que son devoir.³⁰⁾

(王に忠義を尽しても、それは当然の義務にすぎない。)

と言う。又、Rodrigue も、モール人を破ってカスティリアの救世主となった時、Arias と同じことを言う。

Je sais trop que je dois au bien de votre empire, / Et le sang qui m'anime,
et l'air que je respire; / Et quand je les perdrai pour un si digne objet, /
Je ferai seulement le devoir d'un sujet.³¹⁾

(わが身に豚打つ血潮も、わが吸う空気も、みな陛下の下に生きるおかげであることは、身にしみて存じております。このような尊い主君のためにそれを捨てることになっても、ただ臣下の義務を果すにすぎません。) 従って、勲功は、彼にとって、不法な決闘の裁きを免れる理由にならない。王が体現している正義の前で、すべての臣下は平等にその審判を仰がねばならぬという考え方は、Don Gomès の次のセリフと対照をなしている。

Et quelque grand qu'il (=crime) soit, mes services présents / Pour le faire abolir sont plus que suffisants.³²⁾

(またどんなに大きな罪であろうと、わしの今のご奉公は、罪を帳消しにしてまだ余りがあるくらいだ。)

ここで用いられている《abolir》という動詞は、現在の法律用語を使えば、大赦を与える或いは不起訴にするといった意味である。

Chimène や Don Diègue も、争いの決着を王の裁きに委ねている。Chimène は、少くとも亡父の《les amis et la suite》を動かし、自ら事態を解決しようとは夢にも思っていない。一方、Don Diègue について言えば、

彼は決闘を是認し、王に許可を求めている。³⁵又、封建社会が内包する力の論理をよく心得ているから、Don Gomèsのような挑発的な形でないにして、武勇が罪を消すことを、息子に暗示する。

... force par ta vaillance / Ce monarque au pardon, ...³⁶

(武勇を見せて否応なしに、陛下がお前を赦すようにしてしまえ。)

実際、Fernand王も、その後、

Les Mores en fuyant ont emporté son crime.³⁷

(モール人どもが敗走した時、彼の罪も消えた。)

と言って、Rodrigueがカスティリアの安全保持にかけがえのない軍人になった時、伯爵殺しの罪について、通常の法を適用することが不可能になったことを認めている。これらの点では、Don Diègueは伯爵に似かよった封建貴族の面影を備えている。だが最終的に、王に服従する意志を持っていることには変りない。

※ ※ ※

《Le Cid》の封建性は、劇中で血統が果している役割によっても、よく分る。勇気を含めて、諸々の才能や美徳の起源は血統にある。戦場に一度も立ったことのない十代のRodrigueが、カスティリア第一の勇士Don Gomèsやモール人の軍勢を、どうして倒すことができたのか。彼が、《月桂樹の中に生をうけるほどの誉れの勇士をあまた産んだ家柄》³⁸の出身だからである。先祖の優れた資質は、年若いRodrigueとDon Sancheの顔つきに既に現れている。

Tous deux formés d'un sang noble, vaillant, fidèle, / Jeunes, mais qui font lire aisément dans leurs yeux / L'éclatante vertu de leurs braves aïeux.³⁹

(いずれも武勇と忠誠に鳴る名門の出、若年ながら双の眼には、雄々しい祖先の輝く武勇が容易に読みとれる。)

このような若者は、ほとんど完成品としてこの世に生を受けるのであって、力を発揮するのに長い下積み期間を必要としない。

Je suis Jeune, il est vrai; mais aux âmes bien nées / La valeur n'attend point le nombre des années.³⁸

(いかにもおれは若い。だが蒼れの高い家柄に生まれた者の勇氣は、年月と関係ない。)

Mes pareils à deux fois ne se font point connaître, / Et pour leurs coups d'essai veulent des coups de maître.³⁹

(おれぐらいになると、ただの一度で存分手並みを見せてやる。小手試しがただちに達人の剣さばきだ。)

血統が人間の優劣を決するという見方は、現実によって当然裏切られねばならない、空想的な性格を持っている。だが、これは身分の固定した封建社会の大貴族達が、彼らの享受する特権の根拠として想定した人間観なのであり、彼らは、この空想を現実にするために、幾度か彼らの誇りを賭けたはずであった。

《Le Cid》中のこの観念が封建的なものであって、近代の反動思想に見られる特定種族の遺伝的優秀性という理念と異なることは、モール人の王の扱われ方を見れば明らかである。Rodrigue が国王に物語るモール軍との戦闘場面は、1636年フランス軍が、当時スペイン軍に占領されていたコルビー奪回のために企てた作戦に似ているとも、或いはHenri IV軍に包囲されたルーアン市民が、1592年に試みた勇敢な反撃に基いているとも言われるが、確証はない⁴⁰。ここに登場するモール人の軍隊の中で、二人の王だけは格別の勇氣を備えた人物として描かれている。形勢不利を知って、大多数のモール人兵士は敗走を始める。恐怖の余り彼らは、自分達の王が無事に退却したか確かめようとしめない。だが、取り残された二人の王は、勇敢に戦い続ける。

(leurs rois). . . Disputent vaillamment et vendent bien leur vie. / A se rendre moi-même en vain je les convie: / Le cimenterre au poing, ils ne m'écoutent pas;⁴¹

(彼らの王は勇敢に刃向って、たやすく命を捨てるをがえんじません。私も降伏

を勧めましたが反応もなく、半月刀を手に、耳を貸そうともしません。) 結局王は降伏し、Rodrigueに le Cidの尊称を与える。これは領主 (seigneur) の意であり、封建世界の主従関係に照らして言えば、彼らが、少くとも精神的には、Rodrigueの臣下の列に加ったことを意味する。Rodrigueとモール人の王は、敵味方に別れていても、互いの勇気を認めており、尊敬の念すら抱いている。王侯貴族は人種は異っても、一樣に彼らの地位にふさわしい美德を賦与されているのである。美德の有無は、身分の上下に対応するものであり、この場合は、モール人の王と一般兵士の対照によって示されている。このような人間観が封建制度に由来することは、容易に想像できよう。

※ ※ ※

以上の考察から、どのような結論を引き出すべきだろうか。まず、Don Gomèsが、Bénichouの描く封建大貴族の特性を見事に備えていることを認めねばなるまい。しかし、Rodrigueや Don Arias, Don Diègueなどは、王権への服従という意味では、むしろ絶対主義の臣下にふさわしい態度を示している。この観点が、Bénichouには欠けている。Don Gomèsは、決して傲慢一方の人物ではなく、年若いRodrigueが決闘を挑んだ時、その勇気と気高い気性を称え、命を惜しむだけの度量を持っている。だが劇の構成上、彼が一種の敵役であり、観客の共感が、Rodrigueら王権を尊重する人々の方に集まるようできていることは否定できない。又、Fernand王のとり扱いを見ても、Corneilleは君主の権威を傷つけないよう、多少の配慮をしている。

もっとも、封建大貴族と王権の対立という図式の中で、作者が明確に一方の側に立って、この作品を書いたとは言えないだろう。上に述べたような理由から、作品全体は絶対王政という歴史の流れに逆らっていない印象を与えるが、たとえば、削除されたDon Gomèsのセリフなど、権力に強制された部分があることも忘れてはならない。決闘に関して附言すれば、Mazarinの時代に書かれた《Don Sanche d'Aragon》(1650年)で、女王Isa-

belle は、Fernand 王が拒んだ決闘の立会いを、一度は Carlos に約束している。⁴²

これらの事実からして、《Le Cid》で述べられている政治的信念を、そのまま作者のものとするのは危険である。決闘の是非を巡る論争など当時の社会状況をかなり忠実に、客観的立場から再現していると言った方が真相に近い。

又、血統に関する封建貴族的の見解についても、これを即 Corneille の思想とすることはできまい。《Don Sanche d'Aragon》の Carlos のように、勃興するブルジョワジーの立場に立って反対意見を述べる人物が存在するからである。⁴³

(3)

Bénichou によれば、中世騎士道精神の特徴の一つは、愛が偉大な行為を促す刺激剤の役割を果すことである。男性が支配する現実社会とは逆に、理想の中では、女性は男性の意志の支配者であり、彼女に思いを寄せる騎士から、丁度封建制度の *suzerain* と *vassal* の関係のような忠誠を期待することができた。この虚構の世界において、男性は女性に対する社会的或いは肉体的優位を放棄して、彼女の意志に従う。愛は女性の同意なしには成就しない。この同意を得るために、厳しい試練を経、輝しい光栄に包まれて彼女の前に現れねばならない。栄光とは武勇だけでなく、種々の美德に通じるものであったし、一方、女性の魅力も美しさだけでなく、精神的要素が重要になってくる。このようにして、愛という欲望から発したものが、美德へ転化していく。⁴⁴

Rodrigue と Chimène の関係にも、このような騎士道精神の反映が見うけられる。Bénichou や Nadal は、騎士道的愛が17世紀のプレッシューな愛の理想の淵源をなすと考えているから、⁴⁵プレッシューな愛と言い代えることもできよう。Rodrigue が Chimène に示す献身、彼女の意志と名誉を重んじること。栄光によって、彼女の愛を勝ちとろうとすることなどは、反映の

例である。たとえば、彼は、国王が決闘の約束に従って、二人の結婚をとり決めた後でも、Chimèneの意志を王命より尊重する態度を示す。

... mon amour n'emploiera point pour moi / Ni la loi du combat, ni le vouloir du Roi.⁶⁵

(私の恋は、このたびの果し合いの取極めも、陛下のご意志も自分のために用いることはないでしょう。)

しかし、≪Le Cid≫という作品を仔細に検討する時、この種の女性崇拜、女性の意志と名誉の尊重という概念だけでは、説明し切れないものが現れてくる。愛における騎士道的な支配者と被支配者の関係が、逆転する瞬間が存在するのである。以下、劇の展開を追いながら、この点を明らかにしていきたい。

一幕六場で、RodrigueはChimèneの父を討って、Don Diègueの恥辱を晴らすべきか否かの二者択一を迫られる。彼に復讐を決意させた動機は何だったのか？ この有名なスタンス中で、彼は、

J'attire ses mépris en ne me vengeant pas.⁶⁶

(仇を討たねば彼女に軽蔑される。)

というセリフをもらす。≪彼女にふさわしくない≫という観念は、同じスタンスの326行目と、三幕四場のChimèneとの対面の場面でも繰返えされる。

Et ta beauté sans doute emportait la balance, / A moins que d'opposer à tes plus forts appas / Qu'un homme sans honneur ne te méritait pas; / Que, malgré cette part que j'avais en ton âme, / Qui m'aima généreux me hairait infâme;⁶⁷

(名誉をなくした男などあなたにふさわしくないのだ。心に思っていただけでも愛して下さるのは勇者としての私、恥辱を受けた私は嫌われるなどと考えてあなたの魅力にさからわなかったら、私はあなたの美しさに負けてしまったでしょう。)

Rodrigueのこの逆説が、決して一人よがりなものでなかった証拠に、彼

女も又、もし、恋人が義務を放棄したら、自分は恥ずかしい思いをすると述懐する。

Et s'il peut m'obéir, que dira-t-on de lui? / Étant né ce qu'il est, souffrir un tel outrage ! / Soit qu'il cède ou résiste au feu qui me l'engage, / Mon esprit ne peut qu'être ou honteux ou confus, . . .⁴⁹⁾

(あの人が私の言う通りにしたら、世間が何と噂するでしょう？ あれほど立派な家柄に生まれながら、あのような侮辱を耐え忍んでいると！ あの方が私と誓った愛に従おうと逆らおうと、私の心は恥ずかしい思いにかられるか、動転するかだけ…)

二人は同じ階級に生まれ、精神的双生児のように同一の思考経路をたどっている。Rodrigue が Chimène の意を汲み、彼女の理想の男性に近づこうとする限り、義務と愛とは共に、彼に復讐を命じているようにみえる。

しかし、実際には、Rodrigue の最後の決断は、このような愛の論理を裏切る形で、下される。

Je dois tout à mon père avant qu'à ma maîtresse :⁵⁰⁾

(恩義は恋人より父上が先だ。)

彼は決して、《Chimène にふさわしくあるために、伯爵と戦おう》とは言わない。恐らく主人公は、この臍腑から湧き上ってくる一種の衝撃によって、彼の女性崇拜を振り捨て、Chimène への思いを断ち切らねば、行動に移る勇気を得られなかったのである。

Rodrigue が伯爵を倒した時、もしこのような区別が許されるなら、劇の中心的役割は彼から Chimène へ移る。確かに、その後のモール人撃退も、Don Sanche との決闘も、彼に与えられた華々しい活躍の場に違いない。しかし、それは、栄光と言う観点からすれば、最初の決闘の言わばヴァリエーションにすぎない。彼の栄光は一段と輝しいものになっていくが、そこには益的拡大があるだけで、質的变化はない。伯爵との決闘がどう裁かれるかという点から見ても、二つの事件は、最初から Rodrigue の方を是としていた王の判断を、補強する役目しか果していない。伯爵の死を知

って王は、

Ce que le Comte a fait semble avoir mérité / Ce digne châtement de sa témérité.⁵⁰

(伯爵の傍若無人のふるまいは当然のむくいを受けたといえよう。)

ともらす。先に触れた通り、モール人撃退は、仮に国王に Rodrigue を処罰する意向があったとしても、それを不可能にした。又、Don Sanche との決闘は、Chimène の訴えに、合法的決着をつける効果がある。だが、これらの事件が、当初の王の意志に何の変更も加えない以上、この観点からは、たいした劇的意味を持たない。

従って、事件が特に観客の関心を惹くのは、それがどのような反応を、Chimène の心にひき起すかという点である。もっと簡単に言えば、彼女の傷ついた名誉心が、Rodrigue との結婚を承諾する方に傾くかどうかということである。実際それらは Chimène に、名誉を危くせずに恋人を許し、彼と結ばれる口実を提供した。彼がモール人を破った時、王女は Chimène に、

Tu poursuis en sa mort la ruine publique. / . . . pour venger un père est-il jamais permis / De livrer sa patrie aux mains des ennemis ?⁵¹

(あの人の死を求めることは、国家の滅亡を願うことです。父の仇を討つためには祖国を敵の手に渡してもいいと言うのですか。)

と言う。又、決闘の結果は、結婚に王命という大義名分を与える。しかし、このような世間的な体面だけでなく、Chimène の内にある誇りの感情が、父親の殺人者の妻となることを許すであろうか？ 彼女の決断が、劇の展開を決することになる。伯爵との決闘の後、観客の視点は Rodrigue のそれに一致して、彼女の態度に一喜一憂する。

ところで、貴族的モラルと愛の葛藤という観点からいうなら、Chimène は最初から、Rodrigue より不利な立場にいる。Rodrigue の場合は、名誉に忠実であることが、結果的に恋の達成を促す。少なくとも Chimène は、彼の勇気と美德を知って、それだけ心惹かれていく。

Ah! cruels déplaisirs à l'esprit d'une amante ! / Plus j'apprends son mérite, et plus mon feu s'augmente: 30

(ああ／恋をする女の心としては、これほどむごい悲しみはございませぬ／あの人の値うちを知れば知るだけ、恋の心は募ります。)

一方、Chimèneの置かれた状況は、このような愛と名誉の幸運な一致を不可能にしている。彼女の名誉は、文字通り恋人の死にかかっている。恋人を救おうとすれば、誇りを捨てて、恋に殉ずる女にならねばならぬ。愛と義務の真の二者択一は、Rodrigueではなく、Chimèneの場合にこそ存在する。

三幕四場で、Chimèneの父の死後、恋人達が初めて会う。《Le Cid》中で、最も美しい場面の一つである。後年作者が《この不幸な恋人が彼女の前に姿を見せると、観客の間に戦慄が起った⁵⁰》と伝えるこの場は、様々な解釈と批判を生んだ。結局のところ、見解の相違は、Rodrigueの言動をどう解釈するかにかかっている。

冒頭彼は、Don Gomèsの命を奪った剣をChimèneにさし出して、自分を殺せと言う。彼女は拒絶する。剣を納めた後、彼は決闘の理由を説明する。ここで彼の説明は、スタンスの独白と矛盾しているとは言えないまでも、微妙な食い違いを見せる。スタンスの最後の決断、《恩義は恋人より父上が先だ》という価値判断の持つ意味が薄れ、代りに先に引用した、《彼女にふさわしくあるために》という点が強調される。恋故に殺人が行われたと、錯覚をおこす程である。Chimèneの愛を失いたくないという主人公のひそかな願望が、彼らの共通のモラルである名誉を楯に、このような自己正当化を試みさせたと考えなければ、この食い違いは理解できないであろう。

Rodrigue の言葉を聞いて、Chimèneも又、

(ta valeur). . . a vengé ton père et soutenu ta gloire: / Même soin me regarde, et j'ai, pour m'affliger, / Ma gloire à soutenir, et mon père à venger. 55

(あなたの勇気が、お父様の仇を討ち、あなたの名譽を守りました。私のすることも同じです。悲しいことですが、私も自分の名譽を守り、父の仇を討たねばなりません。)

と健気な覚悟を述べる。しかし、主人公が、それならこの場で自分を殺すようにと再び迫ると、彼女は、王の裁きに決着を委ねている、自分の手で復讐する積りはないと答える。更に主人公の執拗な要求にあって、遂に彼女は、彼を少しも憎んでいないこと、それどころか、

... malgré la rigueur d'un si cruel devoir, / Mon unique souhait est de ne rien pouvoir.³⁶

(このような辛い義務がどんなにむごく私を責めようと、私のたった一つの願いは、私に何もできないでくれということです。)

と、本心を明かしてしまう。これを聞いて Rodrigue は、<ああ恋の不可思議/>(O miracle d'amour!)³⁷ と感嘆の叫びを上げる。

自分の名譽を守ったように、自己の犠牲によって、恋人にも名譽を守らせようとする主人公の態度は、騎士道的な或いはプレシューな恋にふさわしい崇高さを持っているように見える。しかし、この執拗な死の要求を、顔面通りに受けとっていいものだろうか？ それの結果として、Chimèneに恋の告白をさせる効果を果しているだけに、この疑いは無視できない。ScudéryとAcadémieは、この点に関し、主人公の誠意をまったく信じていない。

... de nous dire qu'il vient pour se faire tuer par Chimène, c'est nous apprendre qu'il ne vient que pour faire des pointes: les filles bien nées n'usurpent jamais l'office des bourreaux.³⁸

(シメーヌに殺されにやって来たと言うことで、彼が実際は気のきいた警句を吐くためだけに来たことが分る。なぜなら高貴の娘が、首切り役人の真似をする訳はないからだ。)

... il n'y avoit point d'apparence de s'imaginer sérieusement que Chimène se résolut à faire cette vengeance avec ses mains. ... C'étoit

montrer évidemment qu'il ne vouloit pas mourir, de prendre un si mauvais expédient pour mourir. . . .⁵⁰

(シメヌが自分の手で仇を討つ決意をするなどということが、実際あり得ると思っていた様子は見えない…死ぬために、これほど拙い手段を取ったのを見ても、彼が死ぬことを望んでいなかったのは明らかである。) Rodrigue が本心から死ぬことを望んでいなかったとしたら、くどい程繰返えされる死の請願は何を目的としていたのか？ Chimèneの恋心を試すこと以外に考えられない。もっとも主人公が、最初からこの意図で Chimèneの許に來たと想像する必要はなかろう。彼女の躊躇を目の当りにして、恋人としての主人公の心情が、相手の本心を知りたいという誘惑に打勝てなくなったのである。ひょっとしたら恋の告白を聞けるのではないか？ だが、それでは Chimène の名誉に対する尊敬の念はどうなったか？ 彼は最後までそれを持ち続けたか？ 彼女の本心を聞き出した後の感嘆の叫びは、彼が当初の信念を忘れ、恋の勝利に酔いしれているような印象を与える。名誉を捨ててまで Chimène が自分を愛してくれる事。それが彼の偽らざる願いではなかったか？

五幕一場の二度目の対面でも、三幕四場とまったく同じことが繰返えされる。Rodrigue を殺す役割が、Chimène から Don Sanche へ移っただけである。彼は Don Sanche に、刃向かわずして討たれると言う。その訳は、勿論Chimèneの名誉にある。

Puisque c'est votre honneur que ses armes soutiennent,⁵¹

(その男の武器はあなたの名誉を守るのですから)

今度も又、Chimène は彼の申し出を拒否する。まず、敗北は Rodrigue の不名誉になるという理由によって。次には、伯爵を倒しながら、別の人間に敗れるのでは、伯爵まで汚すことになるという奇妙な論理によって。名誉心に訴えかける方法が成功しないと知ると、Chimène は再び恋心を仄めかし、驕りに誇って、否が応でも、自分が Rodrigue と結婚しなければならぬようにしてくれと願う。

... songe à ta défense, / Pour forcer mon devoir, pour m'imposer
silence; / ... Sors vainqueur d'un combat dont Chimène est le prix.⁵¹

(ご自分を守ることをお考え下さい。というのもつまりは私の義務をく
じくため、私をだまらせるため…シメーヌが賭けられているこの勝負に
勝ってお戻り下さい。)

この場の愛の勝利は、三幕四場より更に決定的である。結婚の約束ととれる
Chimèneの言葉に歓喜した主人公は、決闘に臨んで Don Sanche を破る。

このようにして、Chimèneの結婚の条件が整う。果して彼女はこれに同
意したのか？ 王は、彼女の誇りを傷つけることを恐れ、一年の猶予期間
を置くものの、

Rodrigue t'a gagnée, et tu dois être à lui.⁵²

(ロドリグはお前を勝ちとったのだから、お前は彼の妻にならなけれ
ばいけない。)

と結論を下す。Chimèneは沈黙する。劇はこの後、彼女に発言の機会を与
えることなく終る。だが、この沈黙が同意の印であることは、五幕一場の
彼女のセリフからしても、ほとんど疑いの余地がない。Castroの《エル
・シドの青春時代》にしる、それ以前のLe Cid伝説を伝える年代記やロマ
ンスにしる、Chimèneの結婚は既定の事実である。Scudéryと Académie
が Corneille を非難するのも、この前提に立っている。

elle prononce enfin un oui si criminel. . . .⁵³

(彼女は最後には非常に罪深い承諾を与える…)

sans autre raison que celle de son amour, elle consent à l'injuste ordon-
nance de Fernand,⁵⁴

(彼女は恋以外に何の理由もなしに、フェルナン王の不当な命令に同意
している)

Corneilleだけが、1660年の《Examen》で、二人の結婚を否定している。
彼女が沈黙するのは、王が結婚を延期し、《時がたてば、何らかの障害が
起って、その実行もおぼつかなくなると期待したからである》⁵⁵。更に作者

は、詭弁まがいの論理を続ける。

Je sais bien que le silence passe d'ordinaire pour une marque de consentement; mais quand les rois parlent, c'en est une de contradiction: on ne manque jamais à leur applaudir quand on entre dans leurs sentiments; et le seul moyen de leur contredire avec le respect qui leur est dû, c'est de se taire,.. .⁶⁰

(私は沈黙が普通同意のしるしとみなされることをよく承知している。しかし、王が話す時、それは反対のしるしなのだ。王の考えに心から同意する時は、必ず賛辞を呈するものだ。然るべき尊敬の念を払いながら、王に反対する唯一の方法はただ黙りこむことである。)

恐らく、このような主張を正当化する意図から、60年版では初版本の次の三行を削除している。

Sire, quelle apparence, à ce triste hyménée, / Qu'un même jour commence et finisse mon deuil, / Mette en mon lit Rodrigue et mon père au cercueil?⁶¹

(陛下、一日のうちに私の喪が始まって明け、新床にはロドリグを、柩には父をいただくというのでは、この悲しい婚礼に道理がたちまじょうか。)

この詩句が、ある種の官能的イメージを喚起するのと、Chimèneが当日に婚礼することだけを拒否しているような印象を与える点が、削除の理由であろう。

しかし、一方で Corneille は、1648年の二巻本の《作品集》に初めて現れ、上記60年版からは削られた《Le Cid》の《Avertissement》に、Chimèneの結婚を伝える Marianaの《スペイン史》と二つのロマンスを掲載している。作者が、自作の結末を擁護する目的で、当時としては史的資料の価値があったこれらの作品を引用したことは明白である。又、《Examen》と同時に発表された《Discours du poème dramatique》にも、結婚に関して、前者と微妙な食い違いを見せる箇所がある。《Le Cid》の結末が、主人

公達の婚礼を明示していないので、作品が完結していない印象を与えるという非難に答えて、*Corneille* は、

Bien qu'il (=héros) aye de l'amour, il n'est point besoin qu'il parle d'épouser sa maîtresse quand la bienséance ne le permet pas; et il suffit d'en donner l'idée après en avoir levé tous les empêchements, sans lui en faire déterminer le jour.⁶⁸

(主人公が恋しているとは言え、礼節が許さない時は、恋人との結婚を口にする必要がない。結婚の日取りが決められずとも、障害が除かれたら行われることを示しておけば十分である。)

と反論している。作者もここで、二人の結婚を既定の事実と考えているように思える。

これらの事実に照らしてみる時、《*Examen*》の主張は、作者一流の詭弁としか思えない。《*Le Cid*》論争が *Corneille* の心に残した傷跡が、このような形をとって作品の弁明にあたらせたのであろう。その後の文学史をひもといってみても、結婚が行われないとするのは、今世紀の *Nadal* 以外見当らない。⁶⁹

ところで、*Chimène* が復讐を諦め、*Rodrigue* との結婚を承諾できたのは、うわべはどうあれ、彼女が恋のために、自分の誇りを犠牲にしたからである。いかに、国王が、

Ta gloire est dégagée, et ton devoir est quitte;⁷⁰

(お前の名誉は救われ、義務は果たされた。)

と言おうと、又、カスティリアの軍神の命を救うという大義名分があらうと、*Chimène* は自分の払った犠牲の大きさを知っている。それが彼女の最後の悲痛な叫びとなって現れる。

Si *Rodrigue* à l'État devient si nécessaire, / De ce qu'il fait pour vous dois-je être le salaire, / Et me livrer moi-même au reproche éternel / D'avoir trempé mes mains dans le sang paternel ?⁷¹

(ロドリグ様が国家にとってどれほど大切なお方でも、私があの方の

ご奉公のご褒美になり、父の流した血に自分の手を染めたようなものと永久に責められねばならぬのでしょうか。)

この点で、AcadémieのChimène評は、社会的良識の立場からすれば、理に適っているように見える。

Elle pouvoit sans doute aimer encore Rodrigue après ce malheur, puisque son crime n'étoit que d'avoir réparé le déshonneur de sa maison; elle le devoit même en quelque sorte, pour relever sa propre gloire, lorsqu'après une longue agitation elle eut donné l'avantage à son honneur sur une amour si violente et si juste que la sienne; et la beauté qu'eût produit dans l'ouvrage une si belle victoire de l'honneur sur l'amour eût été d'autant plus grande qu'elle eût été plus raisonnable. Aussi n'est-ce pas le combat de ces deux mouvements que nous désapprouvons. Nous n'y trouvons à dire sinon qu'il se termine autrement qu'il ne devoit, et qu'au lieu de tenir au moins ces deux intérêts en balance, celui à qui le dessus demeure est celui qui raisonnablement devoit succomber. ⁷²⁾

(勿論、ロドリグの罪は一門の恥辱をそそいだだけなので、彼女が、この不幸の後でなおロドリグを愛しても差し支えなかった。あえて言うなら、愛すべきでさえあった。長い動揺の末、このような激しくしかも正当な恋よりも名誉の方を重んじることにしたのだから、恋は一段と彼女の名誉を高めるのに役立つ。そして作品中で、名誉が恋に対し立派な勝利をおさめれば、そこに生じる美は、それが理性に適ったものになるだけ、さらに大きなものになったであろう。従って、我々は、この二つの心の動きの相剋を否定しているのではない。我々の言いたいのは、この相剋が然るべき姿で終わっていないこと、せめて二つを拮抗した状態に止めておくのならともかく、理性的に考えれば敗れて然るべき方が勝ちを占めていることにすぎない。)

この章の冒頭で触れたように、女性への献身と忠誠の姿勢に貫かれてい

るように見えた《Le Cid》という劇は、ここで決定的な矛盾に陥った観がある。男女の力関係が逆転し、支配者であるはずの女性が名譽を捨て、屈服することによって大団円を迎えるからである。Rodrigue の魅力、勇氣、彼のいや増す栄光が、Chimène の誇りに勝った。一方、彼女の名譽を守るべき立場の Rodrigue も、特に二度の対面の場面では、相手の名譽より、自分の恋の勝利の方に関心を惹かれている。この矛盾をどう考えるべきか？ ここで再び、Bénichou の興味深い解釈に耳を傾けよう。

スペインの Le Cid 伝説は、多くの場合、Rodrigue と Chimène の結婚を殺人の賠償行為とみなしている。Rodrigue に父親を殺された Chimène が、その償いとして王から、彼を夫に賜わる。Couton も、封建時代の古い法では、封主に、臣下の女の遺児の婚姻をとり決める権限があったこと、被った損害は出来る限り同じ形で償うのが習わしであったこと（この場合で言えば、Chimène は保護者の男性を失い、Rodrigue がその代役を果たす）を挙げて、この点について、疑問を抱いていない。⁷³⁾しかし、Bénichou はこの見方に反対する。Rodrigue を罰する代りに、Chimène と結婚させるという法的賠償の観念が明確にされるのは、Le Cid 伝説でも主として16世紀に入ってからであり、二人の結婚に初めて言及している1344年の《年代記》に、この種の観念は見い出せない。そこでは Chimène は、《自分は Rodrigue を既に許しているから》、彼と結婚させてほしいと王に願い出ているだけである。⁷⁴⁾

何故、このような変化が Le Cid 伝説に生じたのか？ その説明に入る前に、彼は中世の文学作品から、殺人者が犠牲者の妻又は娘と結婚するケースをとり出して、分析する。その結果、女性の被った損害を補償するという名目で行われる結婚が、実は別のモチーフを秘めていることを見出す。それは、古代のホメロスに歌われた戦乱の時代や、中世に移行する侵略の時代の遺風を伝える、戦利品としての女性の獲得というテーマである。そこでは勝者が、敗者に属する女性を、勝者の権利に従って自由にする。このようにして、男性の征服者としての自尊心が満足させられると共に、

女性もより強力な保護者を持つことを、必ずしも悲しまなかった。だが、当然のことながら、この行為は、夫婦制度という社会秩序の根幹を揺がす、反道徳的な要素を含んでいる。時代が平和になり、秩序が志向されるようになれば、人々の良心を傷つけない何らかのカモフラージュなしには、このようなテーマは受け入れられない。本質的に、女性の征服というモチーフを秘めている *Le Cid* 伝説が、賠償の観念を導入して変化していくのも、この理由によってである。

種々のロマンスの中でも、初期のものは、*Chimène* 自ら、王に *Rodrigue* との結婚を要求しているが、*Corneille* が引用した作品では、結婚の示唆は王によってなされる。女性の羞恥心が考慮された結果であろう。さらに、*Mariana* によって、二人の結婚の理由に、精神的要素が加味される。*Chimène* は《*Rodrigue*の優れた資質にいたく心をとらえられていた⁷⁵⁾》。最後に *Guillén de Castro* が、二人は、*Chimène*の父が死ぬ前から恋仲であったことにする。又、名誉の感情を恋の情熱と対立させ、劇的興味を盛り上げることを思いつく。このようにして *Corneille* へ至る道が開かれた。

我々は *Bénichou* の大胆な仮説が、どの程度まで信頼に価するものなのか知らない。封建社会における、殺人者と、犠牲者の妻、娘との結婚というテーマが、文学上何か特殊な意味を持つものなのか、又、補償のために両者の結婚を促すような社会的慣習が存在したのかということは、筆者の知識の範囲を越えた問いである。

ただ、*Bénichou* にこのような仮説をたてさせる要素が、*Corneille* の《*Le Cid*》に存在していることは否定できない。劇中の恋人達の言動は、名誉の倫理によって規定され、主人公は *Chimène* の足許に額突いて恭順の意を誓う。その限りでは、彼らの意識は、*Corneille* の時代の貴族社会のモラル或いはギャラントリーに満ちた恋の理念を越えるものでないようみえる。だが、結果として作品が示しているものは何か。男は名誉に殉じ、女は恋に殉じ、あえてこういう言い方をすれば、この女性の弱さ故に、彼らは別離の悲劇を免れて、結ばれるのである。この劇が、ある種の残酷な

印象を与えることがあるとしたら、二人の幸福が、女性の側の全面的な譲歩によってしか成立しないからである。そこから征服者としての男性と、その足許にくずおれる女性というイメージが浮んでくる。Rodrigue は、Chimène という誇り高い女性を、彼女の言わば存在理由である誇りの感情を放棄させるほど、魅惑し尽したことに歓喜する。一方 Chimène は、自尊心の激しい抵抗にもかかわらず、父親の殺害者の男性的魅力に圧倒されていく。最後に、結婚が、この男性的力の勝利の象徴として行われる。これは非常に素朴な、だが我々の本能を刺激する古めかしいテーマであると言わざるを得ない。《Le Cid》が、社会モラルを越えた、男性の勇気と美德による女性征服の物語であるとしたら、良識の立場から Académie が、劇の主題そのものを非難して、＜このような題材を基に、劇作品を作らぬことこそ、最も良いやり方だ⁷⁶⁾＞という厳しい判断を下したのも肯げよう。

〔注〕

本文中、Corneille の作品からの引用は、筆者の断りがない限り、1682 年版による。又、附記した日本語訳は、《コルネイユ名作集》（白水社、1975）、《古典劇集—ル・シッド》（筑摩書房、1961）から適宜拝借させて頂いた。

- 1) Cf., Paul Bénichou: *Morales du grand siècle* (Gallimard, 1948), p.11.
- 2) Cf., *ibid.*, p.28.
- 3) *Cinna*, III, 4, 943.
- 4) Cf., P. Bénichou, *op. cit.*, p.38.
- 5) Cf., *ibid.*, p.20.
- 6) Cf., *ibid.*, p.21.
- 7) *Œuvres de P. Corneille* (éd., des Grands Ecrivains, 1862), t.12, p.475.
- 8) *Ibid.*, p.479.
- 9) *Examen du Cid, Œuvres complètes de Corneille* (Seuil, 1963), p.219.
- 10) *Ibid.*, p.219.
- 11) *Le Cid* (Didier, 1946), II, 6, 637–638.
- 12) *Le Cid*, II, 6. 631.
- 13) Cf., Henri Lyonnet: *Le Cid de Corneille* (Sfelt, 1946), p.162.

- 14) Cf., Georges Couton: *Réalisme de Corneille* (Belles Lettres, 1953), p.83.
- 15) Cf., *ibid.*, p.77.
- 16) Cf., Gustave Reynier: *Le Cid de Corneille* (Mellotée, 1929), p.248.
- 17) Cf., G. Couton, *op. cit.*, p.86.
- 18) *Ibid.*, p.84.
- 19) *Le Cid*, IV, 5, 1406–1410.
- 20) *Ibid.*, II, 1, 376–378.
- 21) Cf., *ibid.*, IV, 6, 1080.
- 22) *Ibid.*, III, 5, 1018–1019.
- 23) Cf., *Œuvres de P. Corneille, op. cit.*, t.12, p.453.
- 24) *Ibid.*, p.479.
- 25) Cf., G. Couton, *op. cit.*, pp.62–63.
- 26) *Le Cid*, II, 1, 365–366.
- 27) *Ibid.*, 394–396.
- 28) *Ibid.*, II, 1.
- 29) Cf., P. Bénichou, *op. cit.*, pp.82–83.
- 30) *Le Cid*, II, 1, 372.
- 31) *Ibid.*, IV, 3, 1233–1236.
- 32) *Ibid.*, II, 1, 367–368.
- 33) Cf., *ibid.*, IV, 5, 1415–1420.
- 34) *Ibid.*, III, 6, 1093–1094.
- 35) *Ibid.*, IV, 5, 1414.
- 36) *Ibid.*, I, 1, 31–32.
- 37) *Ibid.*, 26–28.
- 38) *Ibid.*, II, 2, 405–406.
- 39) *Ibid.*, 409–410.
- 40) Cf., G. Couton, *op. cit.*, pp.54–57.
- 41) *Le Cid*, IV, 3, 1321–1323.
- 42) Cf., Don Sanche d'Aragon, II, 3, 602.
- 43) Cf., 拙論《CorneilleのDon Sanche d'Aragonについて》(広島大学総合科学部紀要V第5巻, 1979), PP. 262 – 263。
- 44) Cf., P. Bénichou, *op. cit.*, pp.49–52.
- 45) Cf., Octave Nadal: *Le sentiment de l'amour dans l'oeuvre de Pierre Corneille* (Gallimard, 1948), p.51.
- 46) *Le Cid*, V, 7, 1779–1780.
- 47) *Ibid.*, I, 6, 324.

- 48) *Ibid.*, III, 4, 886–890.
- 49) *Ibid.*, II, 3, 488–491.
- 50) *Ibid.*, I, 6, 342.
- 51) *Ibid.*, II, 7, 639–640.
- 52) *Ibid.*, IV, 2, 1182–1184.
- 53) *Ibid.*, 1165–1166.
- 54) Examen du Cid, *op. cit.*, p.219.
- 55) *Le Cid*, III, 4, 914–916.
- 56) *Ibid.*, 983–984.
- 57) *Ibid.*, 985.
- 58) Œuvres de P. Corneille, *op. cit.*, t.12, p.451.
- 59) *Ibid.*, p.477.
- 60) *Le Cid*, V, 1, 1498.
- 61) *Ibid.*, 1553–1554, 1556.
- 62) *Ibid.*, V, 7, 1815.
- 63) Œuvres de P. Corneille, *op. cit.*, t.12, p.455.
- 64) *Ibid.*, p.482.
- 65) Examen du Cid, *op. cit.*, p.219.
- 66) *Ibid.*, p.219.
- 67) *Le Cid* (Didier), *op. cit.*, V.7, 1832–1834.
- 68) Œuvres complètes de Corneille (Seuil), *op. cit.*, p.824.
- 69) Cf., O. Nadal, *op. cit.*, pp.178–179.
- 70) *Le Cid*, V, 6, 1766.
- 71) *Ibid.*, V, 7, 1809–1812.
- 72) Œuvres de P. Corneille, *op. cit.*, t.12, pp.472–473.
- 73) Cf., G. Couton, *op. cit.*, p.99.
- 74) Cf., P. Bénichou: L'Écrivain et ses travaux (Corti, 1967), pp.172–177.
- 75) Avertissement du Cid (Seuil), *op. cit.*, p.216.
- 76) Œuvres de P. Corneille, *op. cit.*, t.12, p.469.

Sur *Le Cid*

Nobuya MURASE

- 1) Après la 2^e guerre mondiale, plusieurs chercheurs ont essayé de saisir l'héroïsme cornélien du point de vue historique: P. Bénichou, G. Couton, B. Dort, etc. Certains constatent que les idéals féodaux se reflètent dans les œuvres de Corneille: ses personnages aspirent souvent à vivre selon les mêmes idéals que la noblesse féodale. Et les autres accordent de l'importance à l'influence de l'absolutisme qui les porte à respecter le pouvoir royal ou la Raison d'Etat. Nous aussi, nous allons mettre en relief les caractères historiques dans *Le Cid*: d'abord, en le rapprochant de faits politiques en France au début du 17^e siècle, puis en analysant les relations, chez les principaux personnages, entre l'amour et la gloire, celle-ci étant l'âme de la morale aristocratique.
- 2) Don Fernand n'est pas un roi absolu comme Louis XIII ou Louis XIV. Il a vécu au 11^e siècle en Espagne. Mais comme on ne tient pas compte de la couleur locale à l'époque du classicisme français, la faiblesse de Don Fernand est considérée comme une offense envers l'autorité du roi absolu. En effet, l'Académie condamne à cet égard l'auteur dans la querelle du *Cid*: Don Fernand ne prend pas de mesures convenables, lors de l'attaque des Mores et de l'insulte du Comte à Don Diègue. Corneille le défend en se référant à la comédie de Guillén de Castro, où le roi est plus mou et plus lâche. Du reste, obéissant à l'Académie, il est forcé en 1660 de modifier un peu son édition originale (vers 631).

Le duel illégitime, dit « appel », est à la mode parmi la noblesse française de la deuxième moitié du 16^e siècle et du début du 17^e siècle. On dit qu'environ 4.000 nobles furent tués en duel sous le règne de Henri IV. Afin de l'interdire, plusieurs édits sont successivement proclamés: en 1609, 1617 et, en 1626, par Richelieu lui-même. Mais malgré cela, certains nobles bravent son autorité, car le duel, pour ainsi dire, est un symbole de leur indépendance par rapport au pouvoir royal.

Don Fernand désapprouve le duel (1406–1410), ce qui correspond bien à la politique de Richelieu. En revanche, on trouve dans *Le Cid* un personnage qui représente l'attitude arrogante et révoltée des grands: Don Gomès. Chez lui, la valeur suprême n'est pas l'autorité du roi ni l'Etat mais la gloire ou l'honneur. Il a honte de se soumettre à l'arrêt du roi pour résoudre les affaires d'honneur. En effet, il fait une apologie du duel (acte II, scène 1), mais l'auteur la supprimera plus tard, peut-être sous la pression de Richelieu.

D'autre part, Rodrigue, Arias et même Don Diègue, vieux noble féodal, soutiennent le pouvoir absolu du roi. Après avoir battu les Mores, Rodrigue déclare hautement qu'il n'a fait que le devoir d'un sujet (1233–1236). Il ne pense jamais pouvoir échapper pour cette raison au jugement du roi sur son duel, tandis que le Comte s'en est attribué le droit dans les mêmes conditions.

Que conclure de tout cela? La pièce représente d'une façon assez objective une situation politique française au début du 17^e siècle: l'opposition entre le pouvoir royal et les grands, qui se manifeste à travers le débat sur le duel. L'auteur ne semble pas y prendre parti en opposant Don Gomès aux autres personnages appartenant au parti royal.

3) L'amour de Rodrigue et de Chimène respire un climat précieux au

17^e siècle, qui, selon P. Bénichou et O. Nadal, tire son origine de l'esprit chevaleresque. C'est surtout dans l'attitude du héros à l'égard de son amante que se révèle l'influence de ce climat sur leur amour: l'intention de se sacrifier pour elle, l'estime de sa volonté et de sa gloire, puisque la gloire constitue une valeur suprême chez les aristocrates comme elle. En d'autres termes, il s'humilie devant elle comme devant sa reine. Mais en suivant de plus près les scènes, on est quelquefois surpris par le renversement de leur rôle: c'est-à-dire que la maîtresse se transforme en esclave et l'esclave en maître.

Dans les célèbres Stances, Rodrigue se trouve dans l'alternative: l'amour ou le devoir. Mais bientôt lui vient l'idée qu'il s'attirera les mépris de Chimène, s'il ne se venge pas. Ce pourrait être une bonne raison pour laquelle il décide de conserver l'honneur de sa famille; ici, l'amour ne s'opposerait plus à l'honneur; tous les deux l'inviteraient à se venger. Pourtant, sa décision n'est pas fondée sur ce raisonnement. Il dit seulement: *«Je dois tout à mon père avant qu'à ma maîtresse»*.

Dans son premier entretien avec Chimène (III, 4), il explique pourquoi il a tué son père. Il semble y avoir un petit décalage entre ses explications et la véritable raison de sa décision. Il reprend la logique de l'amour dans les Stances et impute le meurtre à son désir de mériter Chimène ainsi qu'à celui de conserver l'honneur. Mais on sait qu'il a abandonné ce point de vue au cours des Stances; donc, on a peut-être raison de croire que ce n'est pas là le véritable mobile. Alors, pourquoi insiste-t-il tellement sur ce point? N'essaye-t-il pas de se justifier de peur de perdre l'amour de Chimène?

Il lui demande à plusieurs reprises de le tuer. Elle refuse toujours et lui ouvre enfin son cœur: *«je ne te hais point»* : *«malgré la rigueur d'un si cruel devoir, / Mon unique souhait est de ne rien pouvoir»*.

Veut-il vraiment mourir? L'Académie en doute: *«il n'y avait point d'apparence de s'imaginer sérieusement que Chimène se résolut à faire cette vengeance avec ses mains C'était montrer évidemment qu'il ne voulait pas mourir, de prendre un si mauvais expédient pour mourir »* . Si l'Académie a raison, Rodrigue ne cache-t-il pas quelque arrière-pensée sous prétexte de se sacrifier? Peut-être si: il la menace de mourir plutôt pour écouter sa déclaration d'amour que pour défendre son honneur. Et puisque celui-ci ne repose que sur la mort du héros, il préfère sans doute posséder Chimène, quoique privée de l'honneur, que de se séparer d'elle éternellement.

La même chose se répète dans leur deuxième entretien (V, 1). Rodrigue la menace de se faire tuer par Don Sanche. Ne voulant pas sa mort, elle lui promet de l'épouser quand il l'aura vaincu. Ici, le triomphe de l'amour est plus décisif que dans le premier entretien.

Ainsi Chimène épouse le héros. Mais leur mariage n'a lieu qu'au prix de l'honneur de la première. Le roi a beau lui dire: *«Ta gloire est dégagée, et ton devoir est quitte »* , elle-même sait que la vérité est contraire: *«Si Rodrigue à l'Etat devient si nécessaire, / De ce qu'il fait pour vous dois-je être le salaire, / Et me livrer moi-même au reproche éternel / D'avoir trempé mes mains dans le sang paternel »* . De même, l'Académie lui reproche d'avoir préféré l'amour à l'honneur: *«sans autre raison que celle de son amour, elle consent à l'injuste ordonnance de Fernand »* .

En apparence, comme nous l'avons dit, l'amour de Rodrigue consiste à respecter l'héroïne: dans ce sens, il reflète l'esprit de l'amour précieux ou chevaleresque. Mais au contraire, la pièce finit par l'humiliation de l'héroïne. Si *Le Cid* nous donne une impression cruelle, c'est que le bonheur des héros exige forcément la perte de la gloire de Chimène.

D'ailleurs, dans les deux entretiens, le héros ne semble pas se conduire d'un bout à l'autre comme un chevalier qui fait grand cas de la gloire de son amante.

P. Bénichou découvre dans la légende du Cid le thème de la conquête d'une femme « *qu'il faut mettre en relation avec une pratique de guerre fréquente jadis* » . Il demande qu'on songe aux captives des temps homériques ou de l'antiquité, lesquelles sont le lot du vainqueur (L'Ecrivain et ses travaux: pp. 185–186). On ne sait pas si son hypothèse est ou non bien-fondée. Mais Corneille nous raconte sans doute dans sa pièce une histoire très simple: Rodrigue, comme homme, choisit l'honneur, et Chimène, comme femme, l'amour: la gloire grandissante du héros l'éblouit et elle se décide à sacrifier la sienne à l'amour. Il s'agit d'un thème très ancien, enraciné dans l'imagination de l'humanité.